



マリンビスト古徳景子は、日本はもとより欧米・中南米をはじめメキシコを拠点に「音楽あり隔てなし」の信念の基、コンサート活動をしています。

2009年からはメキシコ・チアパス州立芸術科学大学 (Universidad de Ciencias y Artes de Chiapas) マリンバ・打楽器科准教授として後進の指導に力を注いでいます。

ラ ティエラ デ ラ エスペランサ  
「La tierra de la Esperanza (希望の地)」について

私が住んでいるチアパス州は、昔からマリンバが栄え、グアテマラの国境に位置します。チアパス南東のアカコヤグアは、ラテンアメリカにおける移民の第一歩が刻まれた所です。チアパスと日本の交流は、今から115年前の明治30年(1897年)、明治新政府の外務大臣・榎本武揚が人口増加の問題対策のため、日本人移民36人をチアパスに送り込んだ事からはじまりました。

私は、この地を訪れるまで「メキシコ榎本植民史」の事を全く知りませんでした。明治の青年たち(日本から来たサムライ)が、この未知の場所で、力強く生きたさまに、心を打たれました。

時を経て、同じ日本人として彼らの軌跡に巡り合え、移民団の記念碑の前に立った時、音やメロディーが浮かびました。トゥクストラ(州都)に帰るや否やすぐに、「メキシコ榎本植民団」をテーマとした『La tierra de la Esperanza』(希望の地)を作曲しました。

当時の厳しい環境や風土の中で耐え抜いた青年たちのチアパスが、希望の地となり、それまでの経過や背景、日本への想い等が、マリンバの音色となって流れます。きっと彼らも当時、マリンバを奏でたに違いない!

曲の中盤には、以下の詞の歌が入ります。

「いくどきの日にか 心行くまで  
泣ける日も われにもあるが  
泣かずに 耐え来て」

演奏者は、同大学の Israel Moreno (教授)・Roberto Hernandez Soto (講師) の両氏と古徳景子です。国境や文化・言葉・習慣を分かち合い、心を一つにしてマリンバと打楽器(マリンバアンサンブル)の音色を奏でます。

2012年/記

\*参献: サムライたちのメキシコ (原作: 上野久「メキシコ榎本植民」中公新書1994年 著者)